

Title	<批評・紹介>錢穆著 朱子新學案
Author(s)	荒木, 見悟
Citation	東洋史研究 (1983), 41(4): 769-775
Issue Date	1983-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153877
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

た。最後に特異な資料として、顯徳五年二月國保文書（大谷文書二八三八號）をあげられる。社官が縣廳に呼び出され、懲罰をうけている等、他の多くの社とは性格を全く異にすると思われ、今後の検討に資するとして結ばれる。

著者の明らかにされた敦煌の社は、サークル的な社であるとともに、街区にあった社としての地縁的性格を一部もっていたと見られる。より郊外では、すなわち村落には、全くの地縁的な社があつて、これらに關係する文書が混在していたのではあるまいか。

以上本章で著者が明らかにされた社の内容は、從來知られた断片的な知識にくらべて、最も詳しい壓倒的な量と、生々しい實體をはじめて我々に知らしめてくれた劃期的論考である。中國内地の社の研究に裨益するところ測り知れないものがあるといえよう。

本書は全て嚴密な考證と既述のごとく整然たる論證によつて構成されており、筆者の淺學によつて曲解するところが多かつたことを惧れる。紙數の關係もあつて、部分的な紹介に終つたところもかなりあり、そして何よりも精緻な論證の筋道を的確に紹介できず、結論のみ記してしまつたことについて筆者の御寛恕を乞う次第である。各論考に關連する他論文、その他論文執筆時の批評に對し、懇切な行きとどいた紹介と配慮がなされていることを附記しておくたい。

- (1) 『新編分門標題皇朝箋要綱目』卷五十六。
- (2) 『史林』54—2。
- (3) 『後村先生大全集』卷八十九。

- (4) 同右、卷百八。
- (5) 丹喬二「北宋の方臘の亂に關する基礎的考察」、『研究紀要』日本大學人文科學研究所。

一九八二年二月 京都 同朋舎

A 5 版 五八六頁

錢 穆著

朱子新學案

荒 木 見 悟

一

著者（一八九五年生）は、『先秦諸子繫年』『中國近三百年學術史』等の名著により、その學識を高く評價されている碩學であるが、朱子への關心は三十歳未滿の頃より芽生えたといひ、現在、『中國學術思想史論叢』(四)（臺灣、東大圖書有限公司刊）におさめられている「朱子心學略」「朱子學術述評」の兩論文は、本書よりも二十餘年前に執筆されたものであり、『宋元學案』を披閱したのち、それより更に二十年をさかのぼるようである（右論叢序）。

ところで右の兩論文において、著者が強調しようとした一點は、「朱子の心學に通じなければ、朱子學の全貌は分らないし、また朱陸異同の實態も分らない」（一三二—ページ）の語に端的に示されているように、朱子學を心學と規定し、而もそれは最も優秀な心學であると斷定するにある。その根據は、「朱子は心を外にして、性を

語り、理を語ることとはなかった」（同上）というにあり、その意味では、陸王と共通の基盤に立つとしながらも、「王學の末流は、良知を重んじ過ぎて、そこに萬理をすべて具えるといい、ついに外物を全く無視して、ひたすら我心のままに振舞おうとしたために、言うにたえぬ弊害が生じた」（二四〇ページ）という。ここで、「過分に良知を信ずる」とはどういうことか、そこにかもし出された「弊害」がどういう性格のものであるかが問われてこそ、朱王兩學の異同が明確になるはずであるに拘らず、著者の論考には、そうした問いかけの姿勢は全くみられない。著者はまた、天理を説く點では、朱子も陽明も變らないというが（二五一ページ）、その天理の實質・構造・認定様式に、朱子と陽明とは相異があるのではないか、そしてそこに理學と心學との分岐する由來があるのではないかという反省も、全く缺如しているのである。以上のような手順をぬぎにしたままで、「心學の見事な點を、朱子はあますなくそなえており、心學の流弊を、朱子はあますなく脱却している」（一五七ページ）と断定されても、その説得力は微弱だと言わねばならぬ。このたびの名著『朱子新學案』において、著者は、それだけの周到な用意のもとに、その舊説の補強をなし得ているであらうか。

二

本書は、全五冊、二七三〇ページ（別に索引三三三ページ）の堂々たる巨冊であって、大項目を立てること五七、小目約一、五七〇、思想・學術・行事の三部門あるべき中、行事の部は省略したというが、「從遊延平始末」とか、「朱子與二陸交遊始末」のごとく、明らかに行事とみなし得る項目がかかげられている外、一見、純粹に思

想・學術にかかわる項目であっても、それに關する朱子の年次的發展を細かく考證しているために、これを逐次抽出して行けば、宛然として一篇の「朱子學術年譜」を構成することも不可能ではない。周知のように、『朱子文集』『朱子語類』等におさめる資料を、朱子の生存年次別に整理する作業は、すでに王白田・朱止泉・夏竦甫等の清儒によって精細に推進されて來たのであるが、諸説必ずしも一致しない論點もいくつ残されており、本書の著者が、獨自の新説を提起している場面も、しばしば見受けられる。その一々の當否はともかく、そこに著者の容易ならぬ苦心のあとが偲ばれるのであり、これが本書撰述の重要意圖の一つであった（第一冊、二三五ページ）。

本書撰述のいま一つの重要契機は、『朱子新學案』という書名自體に表明されている。「學案」という稱呼から直ちに想起されるのは、黃宗羲・全祖望によって編集された『宋元學案』であるが、宗羲は劉戴山ゆずりの王學の氣習をとどめ、祖望は李穆堂の偏見に染まり、陸學には寛容、朱學には冷淡、甚だしく門戸の見に執われている。にも拘らず、この書は、今日でも宋代儒學研究者の必讀書となっており、この偏見を矯めなければ、朱子學の堂奥に入ることとは不可能だ、という（同上、二三三ページ）。たとえば、この書の「晦翁學案」には、中和說四篇をおさめるが、朱子の新舊兩說を混同し、みだりに刪節を加えて、中和說一・二・三・四と總稱するのは、甚だしい曲解であり（第二冊、一五四ページ）、また「上蔡學案」の案語に、「上蔡は朱子の先河である」（第三冊、一七九ページ）とのべられているのも、史實に契わぬ發言だとされる。さればこそ朱子學の面目を正しく傳える「新學案」が撰述されねばならなかったのである。その他、朱子學が後世の繼承者により不當に歪曲

されたという反省（第一冊、二二三ページ）、著者のおかれた政治的環境への慷慨（同上、二二三ページ、及び三九ページ）なども、奮起の要因となったようである。

こうした配慮の下に、著者は六年の歳月をかけて朱子の著作の讀み直しを行ったわけであるが、その到達した結論は、朱子は孔子と並ぶ、中國歷史上最大の儒者であり、これに比肩し得る第三者はないということであり（同上、一ページ）、全巻至るところに、朱子への最高讚美をくり返してやまない。「新經學を創造し、新理學を發展させ、經學と理學とを結合し、これに百家文史の學を加え、先秦に直接し、當時の儒學をして理想的な新しい峰に届かしたことは、漢唐より北宋に至るまでの諸儒の及ぶところではなく、孔子以來の儒學を集成したというも、決して過言ではない」（同上、三三ページ）というのは、その一例である（その他、第一冊、二二六ページ、第五冊、一五一ページ等参照）。その度重なる嘆辭は、ほとんど朱子を神格化するに近い。こうした朱子絶対視の感覺と、著者のいう「門戸の見からの離脱」とが、果して恰好よく兩立し得るものであるか否か、不吉な豫感に襲われざるを得ないのであるが、この歴大な著述が、ともかく破綻をみせないまま、一貫したまとまりをもち續けているのは、朱子への徹底した傾倒ぶり、項目網羅的手法が、その支えとなっているからであろう。その主張を強化するために、王陽明はもとより、程篁墩、曹月川、羅整菴、黃泰泉、王浚川・劉蕺山・黃宗義・顏習齋・李穆堂等、明清諸儒の語を適宜引用し、その發言を介して朱子學の性格を、一層鮮明に描きなすべく工夫したあとがみえる。その間、特に注目すべきは、陽明學との對比と、清朝考證學者への反撥であるが、後者については、清朝朱

子學者の主張の範圍を出ないので（第五冊、一九一ページ参照）、前者についての著者の理解態度を検討することしよう。

三

朱子自身は、みずからの學問を、理學と呼ぶことはあっても、心學と呼んだことはないが、宋末にすでに朱子學を心學と呼ぶ者があらわれ、明代に入り、王陽明の心學が隆盛をきわめるや、その向うを張つて朱子心學説も熱氣を帯び、『朱子心學錄』と題する編著すらあらわれるに至った。この問題に、朱子學の側から一應の結着を與えたとみられるのは、「心と理とは、分つて二件となすべからず。心を舍かば、何を以て理を見ん。理を傳うるは、即ち心を傳うるなり」（漢學商兌、卷中之上）という方東樹の語ではないかと思われる。従つて本書の著者が、朱子學を心學と規定し（第一冊、四八ページ、第二冊、一ページ）、「朱子の學術論は、すべて心學に始まり、心學に終る」（第二冊、四七二ページ）とまでいふのは、あながち著者の創唱ではないのである。もともと著者は、「朱子の學術論は、すべて心學であり、また理學である」（同上、四五八ページ）ともいうから、朱子は心學にして理學を兼ねていたということになるであろう。一方、陽明學を理學と呼んでいることもあるから（第一冊、二二二ページ）、陽明學も心學にして理學ということにならざるを得ない。してみると、朱子と陽明とは、「心學にして理學」という性格を共有することとなるわけであるが、それを伏線として著者は、從來の、朱子學は理學、陽明學は心學という公式に反撥し、この兩者の間に異質性は存しなかったと認定し、朱子學は、理學としても、心學としても、陽明學を凌駕すると斷定したい

のである。

歴史的にみれば、理學・心學という術語が、一定の基準によって使い分けられて來たわけではないから、朱子も陽明もともに、「理學にして心學」という言い方がまちがっているとは言えないであろう。しかし陽明が朱子學の前に立ちはだかつて、「聖人の學は心學なり」と叫び、心學の名において朱子學の超克を宣言した時、從來、漠然と朱子學に冠せられて來た心學の呼稱は、その實質を喪失し始めたのではなかったか。それが陽明の奢りであるか否かの忠實な論證をぬきにして、依然として朱子學と同質の次元にあるとし、心學としての規模の大小を比較するのは、決して妥當な方法論とはいえないであろう。著者は陽明學を批判して、「良知説は、當下の工夫をいうだけだが、朱子は兼ねて究極の境界までのべている」(第一冊、八四ページ)とか、「良知は、格物を棄てて致知を講ずるのだから、その知は直觀知にとどまり、より以上にその仁愛を廣げることではできない」(同上、二二二ページ)「良知説は、心を以て心を識らんとする佛教的理説に過ぎない」(第二冊、二四二ページ)などというが、これらは門戸の見に執われた既往の朱子學者の口吻を模したに過ぎない。このように陽明學を極度に低く評價しながら、これを異端として朱子學圈外(或いは儒學圈外)に追放しようとしなのは、偏狹固陋な朱子學者よりも寛容なよそおいを示すのであるが、圈内に引留めるのは、かえって朱王の優劣を論じやすくなる下心があるからである。だから朱子と陽明との接點を容認して、「宋明の理學家や禪宗は、内を重んじて外を輕んずる傾向をまぬがれないが、陽明の事上磨鍊説は、朱子の意見と合致する」(第二冊、四九七ページ)「陽明が折にふれ天理を存し人欲を去ること

を教えるのは、朱子と餘りかわらない」(同上、四六七ページ)「大學誠意章についての朱子の注釋は、陽明の誠意解と、符節を合する」(同上、四二四ページ)などというのは、朱子學のおこぼれにあずかって陽明學が成立し得たことを證明しようとするに外ならない。

「朱子學は心學である」という著者の主張は、朱子學の傘を無限に廣げ、それによって以後の思想史全般を掩い盡そうとするねらいをもつものである。それでは著者は、その心學なるものをどのよう規定するのであるか。これについて著者が、明確な概念規定を示している場面は見當らぬようであるが、要するに朱子ととも心と理の一致を言い、特にその心は事理内外を貫く點で、陸王や禪をしのぐ精緻な心の理論を展開している、というに盡きるようである。しかし陽明の出現により、宋明心學路線に重大な屈折が発生したからには、一方的にこれを同一範疇内にまづめ込もうとするのは、無謀な試みと言わねばならぬ。陽明學においては、心意知物を一體化し、心と性を分たず、事と理をへだてぬ渾然たる統一體を心と名づけ、この心に全分の責任を荷わせ、理の成立・構成もすべてこれを基盤とする。さればこそ「心即理」といわれる。「心即理」とは、心と理とが一致する(或いは心を理に合わせる)ということではなく、理に對して心の自主性が保證され、保證さればこそ心が常に意欲的に理の生成に取組み、その實現に責任をもつということである。心と理との一致は、その效果としてあらわれる事態であって、當初から心を理に合致させるべく操作することではない。だから陽明學において、時に「性即理」と稱することがあっても、それは心と性を一體視した上のことであって、實質的には「心即理」と變

りはない。これに對し、朱子學の場合はどうであるか。何よりも著者自身の言葉が、その心學としての不徹底性を實證してくれる。

「陸王は心即理を主とし、餘り性に言及しない。一切をあげて心に歸するからこそ、性を説く要がないのである。朱子は理と氣とを分説し、性は理に屬し、心は氣に屬する。だから心と性との間には區別があつて、分言もできるし、合言もできる。分言する場合には、心即理といえるが、合言する場合には、性即理とはいえても、心即理とはいえない」(第二冊、二ページ、また第三冊、五二ページ參照)。とすれば、心と性とは、陽明學にいうが如く、無條件に一體化さるべきではなく、そこに何らかの區分・辨別がなされていることは明らかであろう。つまり心即理と性即理とは、その内容を異にせざるを得ず、朱子學の重心はあくまで後者におかれている。だから著者も、「もし心即理というだけなら、心を重視するかのようでありながら、實は心の分量と機能を著しく輕減することになる」(第二冊、三六ページ)と危懼するのである。なぜそういうことになるのか。性なき心(理の糸の切れた風のような心)は、空廻りするに過ぎないと考えるからであろう。著者のこの發想は、みずから理學と稱した朱子以來の傳統を忠實に受繼ぐものである。而るにこれを改めて心學に讀みかえ、あまつさえ王陽明及びその後學を凌ぐ體質をもつと主張するところに、著者の決定的誤算があつたのである。

右の心學論に關連して、著者が見落している重要な一點を指摘しておきたい。先にものべたように、本書には朱子學理解に必須とすべき項目が列擧されているにも拘らず、「定理」(一定之理)という項目が缺落している(第二冊、二八五ページに半行ほどの言及があ

る)。しかし『大學或問』その他朱子の著述にしばしば見られるように、この語は朱子學の存立を賭けた基本概念であり、その理學たる所以も一にここにかかっているのである。定理の基盤がゆらぐ時、朱子學の屋臺骨は倒潰の危機に瀕する。陽明心學は、まさにそこを衝き、心を所與の理から解放することにより、かえつて理再生の道をつかもうとしたのである。誤解を恐れず簡明に要約するならば、朱子學は定理學、陽明學は不定理學なのであり、これほどの重みをもつた術語を注視し得なかつたところにも、著者のいう心學論の弱點が露呈しているのである。

このような事態を招いた原因は、どこにあるのであろうか。上來の論述でも明らかなように、苟くも心學を口にする以上は、明代思想全般への透徹した理解が要求されるに拘らず、著者の準備は餘りにも不十分であるように見受けられる。朱子についての「學案」であるから、明代は括弧に入れられてもよいではないかという辯護論が持出されるかも知れないが、「朱子學は完璧な心學である」という主張を強行しようとするは、いきおい朱子と陽明以後の明代思想の動向とをつき合せてみることは、不可缺の要請なのである。それを意識すればこそ、著者も明儒の語を隨所に點綴しているのであるが、陽明の『傳習錄』、羅整菴の『困知記』を除いては、すべて『明儒學案』からの孫引きであつて、より基本的資料を披閱したあととはみえない。著者の明儒に對する研究の幅は狭く、これがその心學理解の大きな障害となつたのではあるまいか。

四

次に著者の、禪佛教についての取扱ひ方を一瞥してみる。本書に

は、「論禪學」という章を設けているが、その冒頭に「明代の儒者が、儒教と佛教の區別を論ずるのは、すべて朱子の説にもとづく」(第三冊、四八九ページ)とあるのは、全く根據のない發言といわざるを得ない。すでに朱子と陽明との間に心學としての性格の相異があるとすれば、心學としての禪に對するにも、當然異なつた對應の仕方が生ずるはずだからである。朱子學によつて抑制されつづけた佛教が、明末に至り掉尾の光芒を放つたという事實を想起するだけでも、そこにただならぬ氣配を讀みとるべきであらう。

さて著者はここでも例により、朱子の排佛の語を羅列しているのであるが、その焦點の所在が不明瞭なのである。せっかく朱子の公案禪攻撃の語を引用しながらも(同上、四九〇ページ)、公案禪の實態掌握がしつかりしていないため、「朱子は當時の禪門中の最高の秘義を把握している」といっても、何をどう把握しているのかわからずもない。朱子が「佛家の高き底」(第二冊、二八一ページ所引)と呼ぶ禪とは何であるか、それが「一世を鼓動し得た」のはなぜであるかが、ここでも等閑視されているのである。これは具體的には大慧宗杲の禪を指すはずであるが、著者の斬り込みは、その手前で停止してしまっている。そうした見通しの乏しさが、「禪宗は心即理の説を主とするものだと、朱子は語っている」(第一冊、五一ページ)という不用意な發言を誘發することとなる。ここに引用された朱子の語には、「正に天理を見ざるが爲に、専ら此の心を認めて主宰と爲す」とあるだけで、「心即理」という語は使用されていないのである。それどころか朱子の排佛の標的は、禪の理障説(理は悟りの障礙になるとしてこれを拒否する説)にあったのであり、禪の空觀に心即理説を許容することは、決してあり得なかつたのである。朱子の語をなぞるにしても、その眞意をわきまえねば、『宋元學案』の轍をくり返すことにはなりはしないか。ひとり禪だけではない。朱子を取巻く同時代の廣範多岐な思想分布の状況に通達してこそ、朱子發言の眞意を汲み取る道が開けるのである。

ここから顧りみる時、陸象山や禪宗とは異なつた意味において、朱子の強大なライバルであつた功利學派に關する項目が缺如しているのも氣がかりである。「史學」(第五冊、七四ページ)の章に、わずかに言及されるに止まるのは、「朱子學案」として不備の排りをまぬがれまい。こうした資料操作上の不均衡は、著者の、朱子周邊諸家への目くばり不足と無關係ではないようである。さすがに『陸象山全集』『黃氏日抄』といったありふれた資料には屬目されているようであるが、朱門の黃勉齋・陳北溪、異端視された張九成・楊慈湖等の論説は、すべて『宋元學案』で間に合せているかにみえる。これはいかにも皮肉である。先に著者の明人文集への涉獵少きを歎じたが、いまここに宋人についても同じ感想をもらさざるを得ないのは、誠に遺憾である。

著者のいうように、朱子はたしかに偉大な思想家である。だがこれを「あらゆる基準を與えた人物」として祭り上げる時、いわゆる道學のベールの中に彼の眞姿は掩われてしまう。「偏見なき朱子像」を描き出すべく撰述された本書も、その熱意が高揚するとともに、結局、道學的意識の中に沈没して行かれたように見受けられる。本書は恐らく道統路線上、最後の勞作として位置づけられるであろうし、またそうあつて欲しい。眞に開かれた立場よりする「朱子學案」が誕生するための、引き幕として本書を活用することは、もちろんそれなりの價值をもつはずである。齡九十に垂んとし、視力も

殆んど失われたと聞く著者に對し、餘りにも非禮の言辭を弄したことは深くお詫びしたいが、その學徳をしたう微衷には、いささかも渝りなきことを附言しておこう。

一九七一年九月 臺北 三民書局
二二經五冊 二七六三頁